

音の散歩路



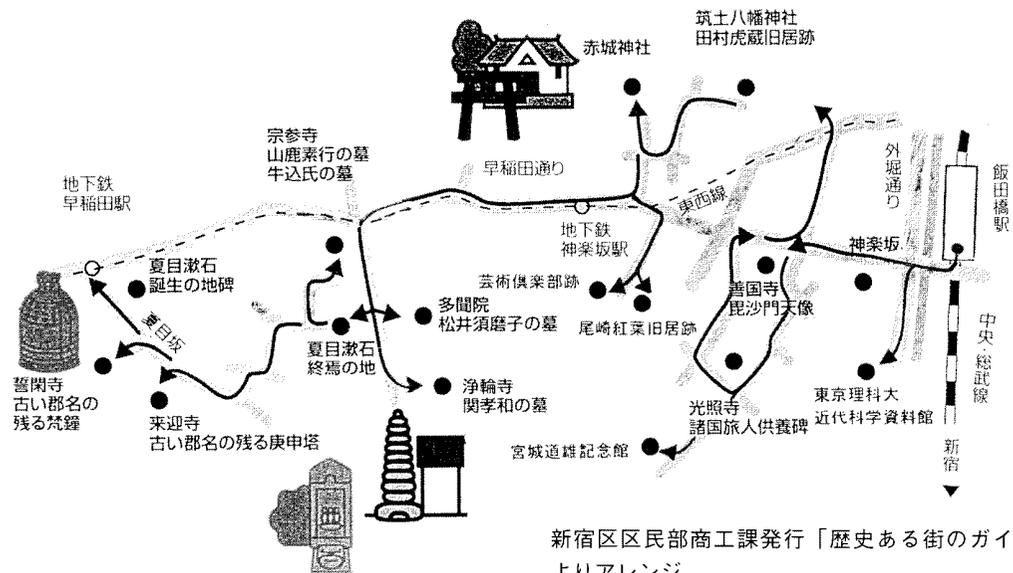
～神楽坂・牛込界限 音風散歩～

中央・総武線の飯田橋駅の長い通路を通して改札を出ると、右手に神楽坂の入口がみえる。緩やかな登り坂の両側に町は展開する（写真－1）。明治後期から大正にかけて山手銀座と呼ばれた繁華街である。路地にふらっと踏み入れれば、京都の裏町を思わせるところや洒落た喫茶店がひっそりと点在し、散策気分が華やいてくる（写真－2）。明治・大正・昭和と文化人が暮らした町であり、花街と文化のにおいが今でも色濃く息づいている。そこを東京理科大や法大など、学生が闊歩する面白い町になっている。

最初に宮城道雄記念館に行ってみよう（写



写真－1



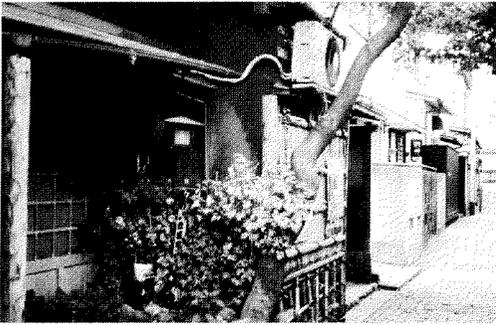


写真-2

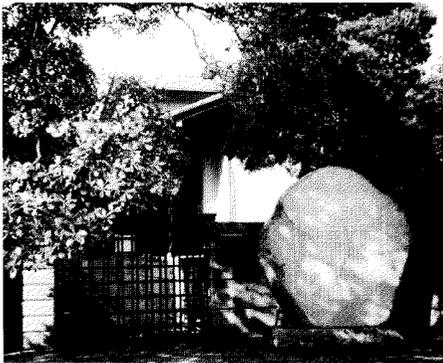


写真-3

真-3)。「春の海」「水の変態」と名曲を数多く残した現代邦楽の父といわれる。愛器の箏“越天楽”や、和洋の音楽が奏せられるように自身で考案した“八十絃”(これは空襲で焼失したため復元品)が展示されている。展示館の



写真-4

裏手に回ると、作曲に使用した書斎である昭和23年(1948)建築の“検校(けんぎょう)の間”が残されている。白色電球に照らし出された箏が、座布団と脇息を控えに主人の帰りを待っているかのようだ(写真-4)。

歌の方では「大こくさま」「うらしまたろう」「うさぎ」などを作曲し、分りやすい唱歌(いわゆる言文一致唱歌)の創造に先駆的な業績を残した田村虎蔵の旧居跡も近所にある。昭和18年(1943)に没しており「きんたろう」の旋律が彫られた記念碑がある(写真-5)。

劇中歌「カチューシャかわいや、別れのつらさ……」で有名な新劇女優の松井須磨子も牛込と関わりが深い。演出家である鳥村抱月と二人で創設した芸術座の拠点である芸術倶楽部跡がある。人気絶頂の大正8年(1919)に、抱月の急逝を追って芸術倶楽部で自殺してしまった。

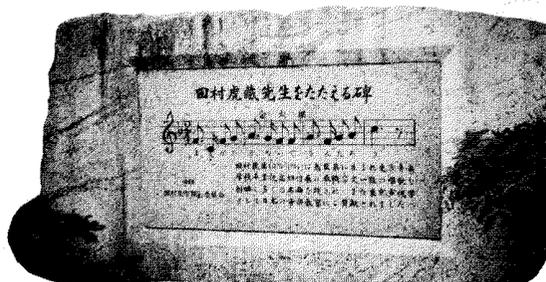


写真-5



写真-6

享年34歳であり、多門院に墓がある。

そして、日本の文豪・夏目漱石が慶応3年(1867)に誕生し、大正5年(1916)に終焉を迎えたのもこの界隈である。日本を代表する作家の生誕の地を牛井屋の店先で偲ぶというのは如何にも残念(写真-6)。終焉の地である漱石山房も公園になっており、真新しい胸像があるのみである(写真-7)。像の左手奥の石塔は夏目家の猫塚であるが、漱石没後に遺族が建てたもの。尾崎紅葉、泉鏡花も牛込界隈で執筆に明け暮れていた。金色夜叉を執筆したのは芸術倶楽部跡から道路を一本隔てた借家であった。

漱石も耳を傾けたであろう鐘の音が誓閑寺の梵鐘である。300年以上前に寄進されたもので、生誕の地と100メートルと離れていない(写真-8)。

漱石の「坊ちゃん」の主人公が親譲りの無鉄砲から入学した東京物理学校、今の東京理科大学も神楽坂入口の左方向に位置している。今年創立125周年を迎える。大学裏手には近代科学資料館がある(写真-9)。東京物理学校を撮影した現存する1枚の写真から復元したもので、明治の建築様式を再現している。エジソンの蓄音機からタイガー計算機・初期の卓上電子



写真-7



写真-8

計算機などなど、その昔、年配の技術者ならば汗をかきかきハンドルを回したであろう懐かしいものが展示されている。紹介ラベルを読むと当時の雰囲気伝わってくる。「昭和45年初任給3万5千円このカシオの卓上電子計算機は30万…大阪万国博開催」などなど。

そして、江戸時代に活躍した日本が誇る数学者、関孝和の墓が多門院並びの浄輪寺にある。関孝和と松井須磨子の墓がご近所というのもこの界隈の歴史を偲ばせる。



写真-9

ふくよかな隆起のある町並みを半日ほど歩くが、ゆったりとした波に乗って回遊気分がつぎつぎと歴史の現場に打ち寄せられる。やがて心地よい疲れに満たされる散歩路である。

(財団 江沢記)

●お問合せ：

新宿区民部商工課 TEL：03-3344-0701

<http://www.shinjukuku-kankou.jp/>

宮城道雄記念館 TEL：03-3269-0208

<http://www.miyagikai.gr.jp/>